

平成23年(ワ)第1291号, 平成24年(ワ)第441号, 平成25年(ワ)第516号

伊方原発運転差止請求事件

原告 須藤 昭 男 外1001名

被告 四国電力株式会社

## 準備書面(19)

2014年 5月20日

松山地方裁判所民事第2部 御中

原告ら訴訟代理人

弁護士	薦 田 伸 夫
弁護士	東 俊 一
弁護士	高 田 義 之
弁護士	今 川 正 章
弁護士	中 川 創 太
弁護士	中 尾 英 二
弁護士	谷 脇 和 仁
弁護士	山 口 剛 史
弁護士	定 者 吉 人
弁護士	足 立 修 一
弁護士	端 野 真
弁護士	橋 本 貴 司
弁護士	山 本 尚 吾
弁護士	高 丸 雄 介
弁護士	南 拓 人
弁護士	東 翔

## 入倉孝次郎の発言

1. 別紙のとおり、2014(平成26)年3月29日付愛媛新聞に、地震動予測の第一人者とされ、原発の耐震設計を主導してきた京都大学名誉教授の入倉孝次郎の次の発言が掲載されている。

「基準地震動は計算で出た一番大きな揺れの値のように思われることがあるが、そうではない。(四電が原子力規制委員会に提出した)資料を見る限り、570ガルじゃないといけないという根拠はなく、もうちょっと大きくてもいい。(応力降下量は)評価に最も影響を与える値で、(四電が不確かさを考慮して)1.5倍にしているが、これに明確な根拠はない。570ガルはあくまで目安値。私は科学的な式を使って計算方法を提案してきたが、これは平均像を求めるもの。平均からずれた地震はいくらでもあり、観測そのものが間違っていることもある。基準地震動はできるだけ余裕を持って決めた方が安心だが、それは経営判断だ。四電は570ガルに関して原子炉建屋や、配管など数千~1万カ所をチェックした。基準地震動を上げれば設備を全て調べ直さなければならないので大変だろう。」

2. 入倉孝次郎は、ついに、基準地震動は目安に過ぎない「平均像」だと認めた。(中越沖地震の知見から)応力降下量を1.5倍にすることについても、明確な根拠があるわけではないと言った。そして、その平均像を超える地震はいくらでもあるとまで言ったのである。
3. では、そのような基準地震動を金科玉条のように重要なものとしてきた耐震設計は、一体何だったのか。いい加減なものに過ぎなかったということ、主導してきた入倉孝次郎自身が認めたのである。従来の耐震設計で、原発の安全性が担保される訳ではないことを入倉孝次郎自身が認めたことの意味は極めて重大である。
4. 入倉孝次郎は、あとは「経営判断だ」とすら言う。しかし、四電の経営判断に原告ら住民の安全が委ねられるようなことは絶対に許されない。
5. 再稼働審査の過程で、四電が、現在の570ガルを620ガルに引き上げる動きが報じられているが、たとえ620ガルに引き上げられたとしても、それによって伊方原発の耐震性が確保されるものでないことも明白となったのである。

# 基準地震動を解く

伊方原発

四国電力伊方原発の基準地震動570μは、調査に基づいて活断層の位置や形状で原発に最も影響が大きくなるよう計算した断層モデルと(小規模な地震観測記録から大規模地震の波形を合成してつくり出す)経験的な方法で総合的に決めている。

基準地震動は計算で出た一番大きい揺れの値のように思われることがあがるが、その値はない。(四電が原子力規制委員会に提出した)資料を見る限り、570μじゃないといけないという根拠はない、もっというと大きなくてもいい。

地震動評価の計算は新

## 3 京都大名誉教授 入倉 孝次郎氏



### 3/29 余裕ある設計 確認重要

3/29  
 余裕ある設計 確認重要  
 伊方原発  
 しい論文を参考にしてお  
 り、恣意(しい)的な部  
 分はほとんどないと思  
 う。あるとしたら(断層  
 安値。私は科学的な式を  
 使って計算方法を提案し  
 てきたが、これは地震の  
 評価に最も影響を与える  
 平均像を求めるもの。平  
 均で、(四電が不確かさ  
 を考慮して)1.5倍に  
 均からずれた地震はいく  
 らでもあり、観測そのも  
 のが間違っていることも  
 ある。  
 基準地震動はできるだけ  
 余裕を持って決めた方  
 だ  
 が安心だが、それは経営  
 判断だ。四電は570μ  
 に関して原子炉や建屋、  
 配管など数千~1万カ所  
 をチェックした。基準地  
 震動を上げれば設備を全  
 て調べ直さないといいな  
 いので大変だろう。  
 しかし、基準地震動を  
 重要なのはこの裕度を  
 確認することだ。旧原子  
 力安全委員会の耐震パッ  
 クチェックでも裕度の計  
 算はやってきたが、民主  
 党政権時に行ったストレ  
 ステスト(耐性評価)で  
 一番弱いところを探す  
 と、それほど余裕がなか  
 った。これは重要なポイ  
 ントで、規制委の審査で  
 きちんと示されるだろ  
 う。

いりくら・こうじろう 68年京都大大学院理学研究科・地球物理学専攻博士課程中退。同大副学長や日本地震学会会長などを歴任。01~12年、内閣府原子力安全委員会専門委員。強震動地震学。73歳。

570μのままにして、それを多少超す地震が来たとしてもすぐ壊れることとはないと思う。580μ(宮城県)でも、東日本大震災のときに600μを超す地震動だったが耐えられた。伊方でもそれぐらいの余裕は持って造られているはず。基準地震動以上の揺れでも大丈夫なように余裕のある設計が行われるべき(聞き手・藤中潤、阪和)